

4.【追悼文】

嶋田 隆先生を偲んで

岩本 由輝

創立期からの会員嶋田隆さんが、1999年12月10日、幽明界を異にされた。1970年頃までの著作に「嶋田隆」とあるのは筆名である。1919年11月16日生まれ、満80歳であった。

嶋田さんは、亡くなるまでの病気を含めて私事をほとんど話されなかったので、大阪の市岡中学校卒で、神宮皇學館本科（国漢）を経て、東北帝国大学法文学部経済科に入学されたことを知っているぐらいである。ただ、伏見の年中行事について、子供の頃の記憶といいながら、いかにも嶋田さんらしく克明に説明してくださったことが今はなつかしい。

嶋田さんは中村吉治先生の最初の門下であるが、学生当時、中村先生はまだ演習を担当されていなかったので直門ではないといっておられた。1943年9月、東北帝大を卒業されたが、10月から戦時下の研究者養成のために設けられた特別研究生の適用第1号となる。特研究生の実体は戦時下に勤労働員された学生の軍需工場への引率をすることにあつたが、動員先の中島飛行機伊勢崎工場近くの伊勢崎織の小工場で、銘仙の経営史料に触れて経済史に開眼し、中村先生の指導を仰ぐようになったと述懐しておられた。それだけに中村先生への私淑には人一倍強いものがあつた。

1948年9月に東北大学法文学部助手になり、以後、東北大学教育学部教員養成課程助教授・教授を経て、1967年4月から宮城教育大学教授に任ぜられ、1971年4月に東北大学経済学部教授に転じ、学部長・大学院経済学研究科長を務めてのち、1983年3月に停年退官、東北大学名誉教授の称号を授与されたが、4月から國學院大学経済学部教授に就任し、1990年3月に2度目の停年を迎えている。

嶋田さんの最初の論文は「幕末、仙台藩における農村分解の一例」（1949）であるが、「諏訪藩農業経営の一例」（1952）はその後の研究方向を示すものとして注目される。この頃、中村先生の著作とともに、有賀喜左衛門先生の著作をよく読んだといっておられた。

1951年から中村先生を中心とする共同研究が始まり、成果は『村落構造の史的分析—岩手県煙山村—』（1956）、『解体期封建農村の研究—諏訪藩今井村—』（1962）として上梓されるが、この2つの村の共同研究において、嶋田さんは緻密な史料解説にもとづき、近世農村の農業労働組織を解明するとともに、その共同体としての分化・拡散過程を実証している。嶋田さんのもっとも充実した仕事は、この2著と中村先生の還暦記念論集『共同体の史的考察』（1965）にみることができる。

私は1959年に今井村調査に参加させて頂いて以来、御指導を賜っているが、嶋田さんはつねに謙虚で、自己主張されず、共同研究の和を保つことに気を配られていた。しかし、著述においては嶋田さんとしての筋を通す強靱さがあり、「関西生まれの東北人」の尊称を奉ったこともある。中村先生は嶋田さんの人柄に全幅の信頼を寄せていたが、嶋田さんの命日は奇しくも中村先生の祥月命日であった。